



No.76

Batton

The best attended top team of next

院長就任ご挨拶

北上済生会病院院長
佐藤 智彦



皆様には、常日頃から北上済生会病院をご支援いただき心から御礼申し上げます。

此の度、平成28年4月1日付けをもちまして、院長に就任いたしました。

私は2年前に副院長として参りまして、同年12月より前院長の代行として、職務に就くこととなり、これまで務めて参りました。今回、院長の辞令を頂きましたので、ここに改めて私のプロフィールと今後の抱負を述べさせていただきます。

私は昭和46年4月に東北大学医学部を卒業後、直ちに故鈴木二郎門下の脳神経外科医局に入局しました。当時の医局生活は今の研修医の先生方には想像も付かない位、厳しいもので、教授を先頭に医局員全員が朝早くから夜更けまで血眼になって研学している姿から「間違い部落」と揶揄（ヤユ）されている程でした。その凄まじさの一端をここに紹介しますと、先ず、医局天井には、いつでも寝られるように5、6人用の寝床（それを我々は蚕（カイコ）棚と言っていました）が設置され、教授室にも二段ベッドがありました。当時、脳外科の手術は脳血流遮断に耐えるべく低体温麻酔であったため、朝5時には患者をエーテル麻酔下に氷水に入れて体温を34℃前後に冷却し、手術終了後の夕方には数時間かけて、ゆっくり常温に戻します。そして回復室に入ってから、後出血のチェックのため、1時間毎のバイタル観察を4～5時間行わなければなりません。このようなメジャー手術が週7～8例あり、毎水曜日は教授回診における厳しい質問に、恥をかかないよう、徹夜で指導医と対策を練り、カルテの記載を行います。一方、研究班は研究朝会といって1週間における実験・研究の成果を厳しくチェックされます。このような日常の医局生活は朝7時半から始まり、夜が白々と明ける午前4時頃に就寝する。まさに、軍歌に在るが如く「月月火水木金」の週間医局スケジュールでありました。

鈴木先生の医師養成は海軍時代の教育をベースにまさに中世時代のギルド制の如く厳しい徒弟制の下に社会人として、脳外科医師として、立派に独り立ち出来るよう徹底的にしごくものであります。新人歓迎会、国際学会での壮行会、帰朝報告会など、何事をする時も医局員全員の前で必ず5分間スピーチが課せられます。「声が小さい」「今、ここで恥をかけ」「若い君達、今が勉強する時だ」「記録に残せ、ペーパー（論文）を書け」「デコスケ」…等々。教授が本当に怒った時は全ての窓ガラスが揺れ、そばにいと息も出来ない程でありましたが、そこには彼の情熱と愛がありました。

このようにして私を一人前の医師として育ててくれた父親が鈴木教授であるなら、その母体である母親は国立病院機構に他ならないと思います。何故なら私の10年間に及ぶ脳研医局生活の半分を占めていたのが国立仙台病院の脳外科でありました。和田徳男先生（現国立仙台病院名誉院長）の下では人徳ある人柄に触れながら、臨床に対するバランスの取れた脳神経外科を学び、入局7年目にして、ようやく無給医の時代から同病院の脳卒中センター勤務医として櫻井芳明先生（現仙台医療センター名誉院長）と脳卒中を主体とした脳神経外科医師の華を咲かせていただきました。この時期、先輩には5年上の児玉南海雄先生（福島県立医大脳神経外科名誉教授）、3年上の吉本高志先生（元東北大学総長）、後輩には3年下の小川彰先生（現岩手医科大学理事長）、

4年下の嘉山孝正先生（元山形大医学部脳外科教授・国立癌研センター総長）、片倉隆一先生（現宮城県立がんセンター総長）、5年下の故溝井和夫先生（秋田大医学部脳外科教授）、藤原悟先生（現広南病院院長）、8年下の鈴木倫保先生（現山口大医学部脳外科教授）等々、今では蒼々たる顔ぶれの中で、臨床や手術に、研究や論文作成に、そして学会活動や啓蒙活動へと、お互いを切磋琢磨し合い、また野球をはじめ春夏秋冬の医局行事に青春を謳歌しました（野球ではピッチャーとして岩手医大脳外科の金谷教室との定期戦で、しのぎを削りました）。そして昭和56年に独り立ちして、大分市医師会立アルメイダ病院脳神経外科の開設にあたりました。そこでは日本の病院では2番目に取り入れたTQC（Total Quality Control；全病院的品質管理）活動をベースとした民間病院のしたたかな病院経営を学び、予防医学としての脳ドックを開設・運営し、県下唯一の救急救命センターでは副センター長として救急医療や災害医療に携わりました。またリハ専門医として脳外科に関わるリハビリテーションの超急性期から回復期、維持期へと完結型のリハビリ方式を構築しつつ、それに関わる地域医療の連携も体系付けさせました。そして大分医大臨床教授と東北大脳外科非常勤講師としての24年間に及ぶ大分での勤務生活から仙台に戻り、平成17年に山元町にある国立病院機構宮城病院の副院長、平成20年には危機的経営状態に陥っていた一関市にある同機構の岩手病院を建て直すべく、その院長に就任しました。

この副院長と院長の9年間に及ぶ時代は、まさに一臨床医の立場ではなく、管理者として組織全体を考えて、如何に病院の各部門の人材を有効かつ「和の心」を持って動かすかを学ばせていただきました。特に岩手病院では、臨床の現場を最優先にして「職員一人ひとりが輝けるように」をモットーにTQC活動を通して5S（整理、整頓、清潔、清掃、躰）をベースとした職場での環境整備とシステム作りを行い、仕事の効率化を図りました。その中心となったのが充実させた医療連携室とそのスタッフ達の活躍でした。対外的には関連施設との連携を緊密にして、地元医師会と提携し、開放型病床の方式を取り入れたり、また高度急性期医療を担う県立磐井病院とタイアップして、県南地域の脳卒中と大腿骨頸部骨折患者の地域医療の病病連携を確固たるものにしました。一方、院内では各セクションの横の連携を図りつつ、空床管理を徹底することにより、病床利用率は約96%と格段に上昇し、平均在院日数も約半分の57日に短縮となり、経常収支率も常時110%前後が維持され、資産残高は就任前の6倍となって、機構本部の病院評価ランクも同規模病院42施設の中で全国2位にまで押し上げました。そのためか、これまで悲願とも言えた新病棟の建設の許可が下り、現在、地下1階、地上6階建ての建設工事が進行中であります。

以上の実績を踏まえてか、私の盟友であります岩手医大小川理事長先生から県立中部病院と北上済生会病院を中心とする中部医療圏の医療連携の正常化、さらには北上済生会病院の経営状況、病院の種々の病根の根絶、機能していないシステムの正常化等々を図るようミッションを頂き当院に参りました。

北上済生会病院は昭和11年の創設以来、先人・先輩たちが大変な苦勞をされて「寛容の精神」「親切的な医療」「良質な医療」「施薬・救療・済生」の基本理念と基本方針の下に北上地域の中核病院として急性期や回復期の医療のほか救急医療、周産期医療、人工透析、保健予防活動、生活困窮者支援事業（なでしこプラン）に積極的に対応し、訪問診療などにも力を注いでまいりました。そして現在、北上済生会病院は5年後の開院を目標に新病院建設の計画が進められております。北上地区は入院施設、訪問リハ、通所リハともに少ない医療環境にありますが、この新病院建設を機会に、市と提携して当院での訪問看護ステーションや在宅医療介護連携支援センターの設置も行い、地域包括ケアシステムを充実させようとの計画もあります。これらは北上済生会病院を核とした地域包括ケアシステムや北上市の町づくりにも大きく貢献するものです。

北上済生会病院は今、大きな転換期を迎えております。

「どんなに辛くても逃げない、負けない気持ち」「一生懸命に頑張る」「一日一日を大切にして最善を尽くす」「己を忘れて人に尽くすは慈悲の極みなり」「仇も恩にして返す」等が私の根底にあるものですので、これからもどうぞよろしくご支援の程お願い申し上げます。